

ニュータウンの過去と現在から 将来の日本社会を考える

関西学院大学法学部 教授 原田 賢一郎

政府の第32次地方制度調査会は、本年6月26日に「2040年頃から逆算し顕在化する諸課題に対応するために必要な地方行政体制のあり方等に関する答申」を安倍首相に手交した。その中では「2040年頃にかけて顕在化する変化・課題」として、「人口構造の変化と課題」な「インフラ・空間に関する変化と課題」などが取り上げられている。

ところで、住民の高齢化や、少子化に伴う 小中学校・高校の統廃合、集合住宅や各種公 共施設の老朽化、空き地・空き家の増加、商 店街の衰退などといった形で、既に上記の諸 課題が同時並行で生じているのがニュータウンである。これらの課題は、大都市圏も含め て人口減少と高齢化が全国的に進む今後の日 本社会で起こりうる多くの課題を先取りする 形で現れたものであり、ニュータウンの過去 と現在を考えることは、将来の日本社会を考 えることにもつながるのではないか。

そうした観点から最初に取り上げるのが、『ニュータウンクロニクル』(中澤日菜子/著、光文社、1,760円)である。本書は、東京都内の多摩ニュータウンをモデルとした若葉ニュータウンという架空の街を舞台として、1971年から2021年までの10年ごとに住民たちの視点から描かれた6編の短編小説集である。その中では、高度経済成長からバブル景気、東日本大震災、そしてすぐそこの未来に至るまでの、地元の町役場(後に市役所)職員(後にOB)をはじめ

とするニュータウンに関わる人々が生き 生きと描かれており、小説であるがゆえ に各年代での状況や今日抱えている課題 をよくとらえることができるように思われ る。本書の最後の方で、その市役所OB が「そこに住むひとがいる限り、町に終 わりなんてない。消滅と再生を繰り返し ながら町は生きつづける。十年、二十年 ……五十年さきの未来に向かって」とつ ぶやいているのが実に印象的である。

次に取り上げるのは、『ニュータウンの社会史』 (金子淳/著、青弓社、1,760円)である。本書では、多摩ニュータウンの事例を中心に、開発を受け入れ多大な影響を受けた地域社会の側に

立って、その変容のプロセスが歴史 的に描き出されている。その中では、 ニュータウン開発に伴う神社の移転・ 再建を契機に開発前の歴史が自覚さ れ、既存の地域社会自体の結びつき が強まり、さらには新旧住民の結び つきも促されるようになったという 事例や、ニュータウンで生まれ育っ たいわゆる「ニュータウン第二世代」



『ニュータウンの社会史』 金子淳/著 青弓社

の動向を細かくたどると、必ずしも「都心居住」だけに流れているとは限らず、むしろ幼少期の「ニュータウン経験」がその後の転居行動に何らかの影響を及ぼしていることが示唆されるといった先行研究の成果などが紹介されている。

最後に取り上げるのは、『孤立する都市、つながる街』(保井美樹/編著、日本経済新聞出版社、1,980円)である。本書は、今日の都市住民が抱える問題と対応不全の現状を明らかにした上で、これからの都市の暮らしを豊かにするために必要な支え合いやコミュニティの形を提案していくことを目指して設置された研究会の成果をまとめたものである。ここでは、現代の都市社会の典型的な姿としてニュータウンを取

り上げ、そのコミュニティの変容について解説するとともに、近年、共同性の回復だけでなく、一緒になって新しい価値を生み出していこうとする「創発的コミュニティ」の萌芽がみられることを、筆者自身が取り組んできた福岡市近郊の日の里ニュータウンの事例で説明する柴田建「閉じて固まった地域を開く一創発するコミュニティによる郊外の継承」をあげておく。



『加立する都市、つなかる街』 保井美樹/編著 日本経済新聞出版社



『**ニュータウンクロニクル**』 中澤日菜子/著 光文社